研究紀要・年報

縄文の森から

From JOMON NO MORI

第8号

《研究ノート》

古墳時代肝属平野における地下式横穴墓出土鉄器についての一考察
新屋敷　久美子

南部九州における中世瓦質土器の蛍光X線分析
黒木　梨絵

植物質資料からみた南九州
－天神段遺跡を中心に－
深川　祐子

全点ドット調査の有効性と問題点
－1970年代から1990年代の調査を中心に－
立神　倫史

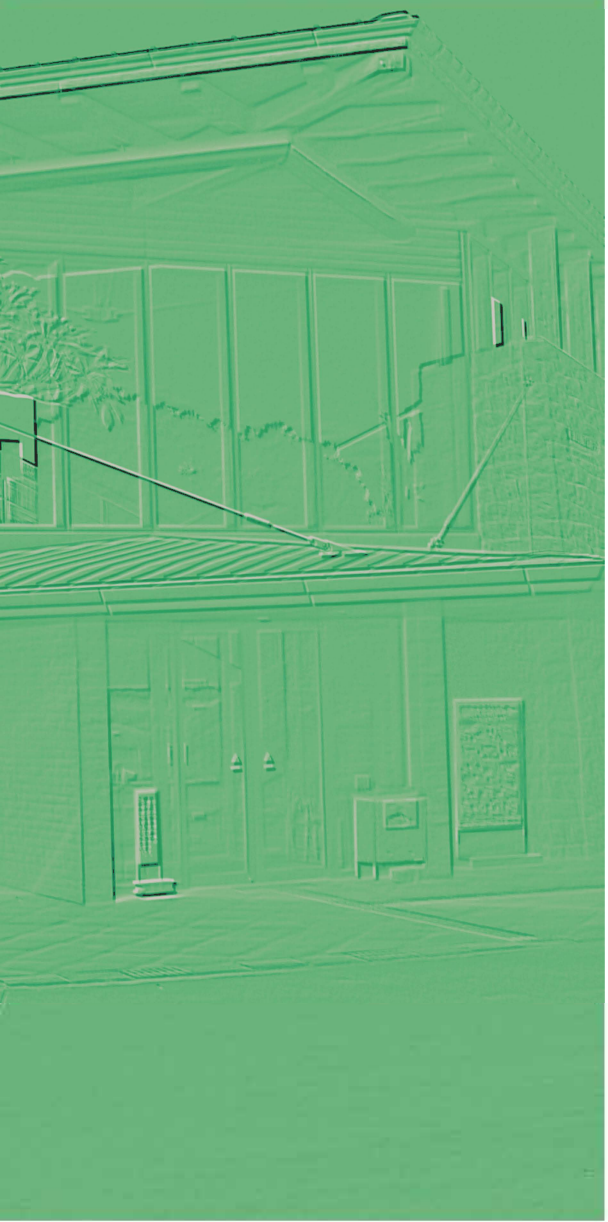
宮ノ上遺跡の縄文時代後期前半の土器群について
長野　眞一

大隅地域における古墳に関わる祭祀遺跡
中村　耕治

郷土教育と考古学
－相川日出雄の埋蔵文化財を活用した教育実践から学ぶこと－
吉元　輝幸

《資料紹介》

南部九州における古代のカマドに関する覚え書き
上床　真



平成26年度　年報

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2015.10

『縄文の森から』 第８号　目　次

≪研究ノート≫

古墳時代肝属平野における地下式横穴墓出土鉄器についての考察

新屋敷　久美子　・・・・・ 1

南部九州における中世瓦質土器の蛍光Ｘ線分析

黒木　梨絵　・・・・・ 7

植物質資料からみた南部九州
― 天神段遺跡を中心に ―

深川　祐子　・・・・・19

全点ドット調査の有効性と問題点
― 1970 年代から 1990 年代の調査を中心に ―

立神　倫史　・・・・・33

宮ノ上遺跡の縄文時代後期前半の土器群について

長野　眞一　・・・・・47

大隅地域における古墳に関わる祭祀遺跡

中村　耕治　・・・・・53

郷土教育と考古学
―相田日出雄の埋蔵文化財を活用した教育実践から学ぶこと―

吉元　輝幸　・・・・・65

≪資料紹介≫

南部九州における古代のカマドに関する覚え書き

上床　　真　・・・・・77

平成２６年度年報　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・85

宮ノ上遺跡の縄文時代後期前半の土器群について

長野　　眞一

Miyanoue site’s pottery group in the first half of the end of the Jomon

Nagano Shinichi

要旨

宮ノ上遺跡で岩崎上層式土器を再確認し，薩摩半島における岩崎上層式土器の分布域を，“薩摩半島の脊梁山地の裾野”として提示する。

キーワード　岩崎上層式土器

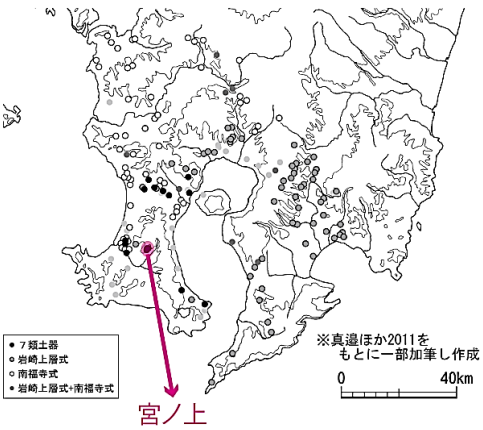
１　はじめに

宮ノ上遺跡〈註１〉の縄文時代については，「宮ノ上遺跡縄文時代編」〈註２〉で報告し，大量の縄文時代後期前半とされる岩崎上式土器が出土していること，そして，それらが遺跡の主体を形成していることを報告した。

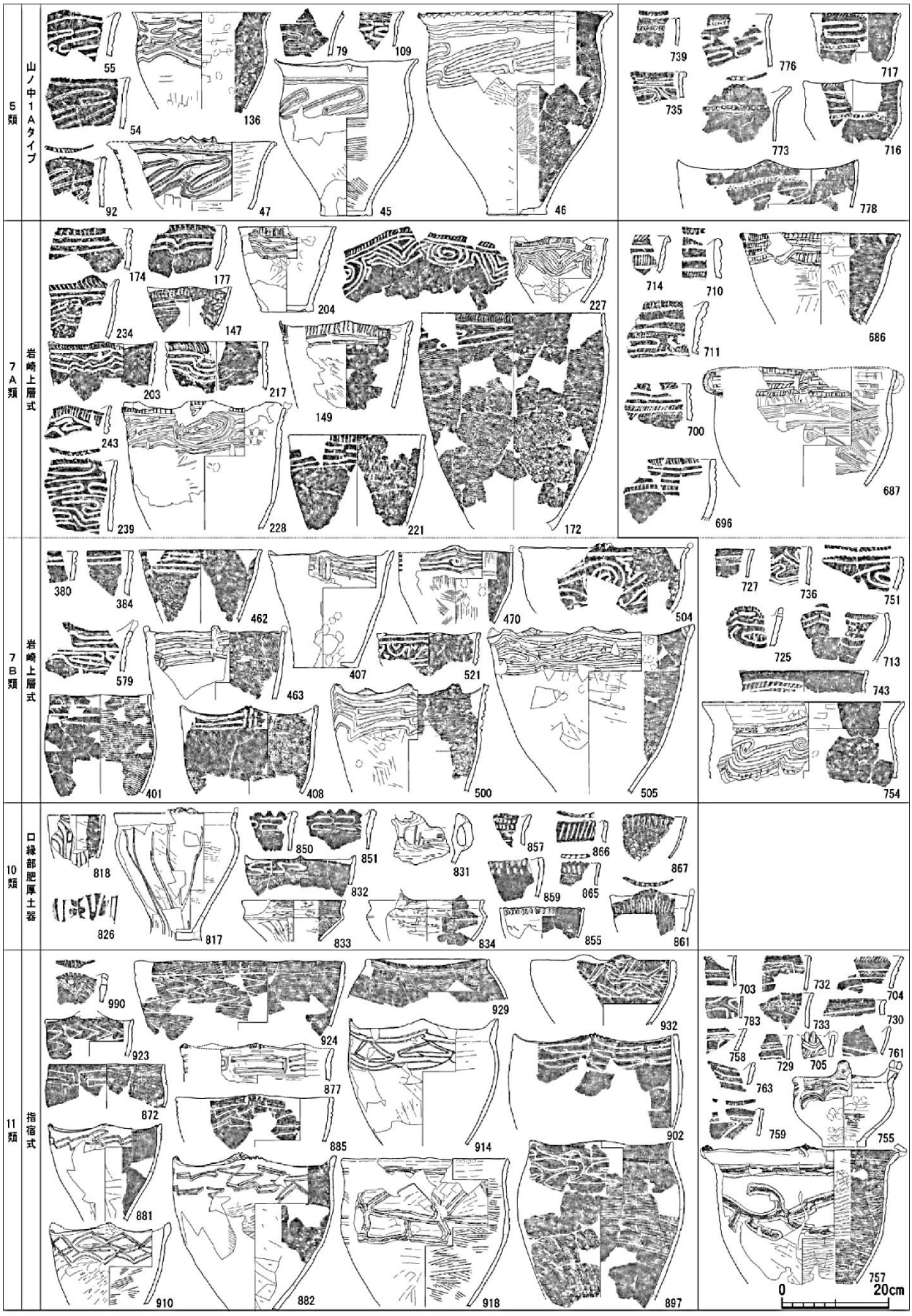
２　阿高式土器及び岩崎式土器

縄文時代後期前半，八代海沿岸地域の出水平野や川内川流域を中心とする薩摩半島北部から鹿児島湾奥部は，前時代の阿高式土器文化を源流とする南福寺式土器や出水式土器が分布圏を形成していることが知られている。そして，近年に至り，甑島の中町馬場遺跡，薩摩半島中央部の日置市上ノ平遺跡や，半島南部の万之瀬川流域の南さつま市下水流遺跡，芝原遺跡等とその分布が拡大してきている。他方，大隅半島は，岩崎式土器や岩崎上層式土器〈註３〉，綾式土器等の条痕整形を基盤とする強固な分布圏を形成している。この時期を代表田する遺跡が末吉町宮之迫遺跡で，器面全域に凹線文を施すものをＡ類，口縁部に半月形の凹線文を巡らすものをＢ類，胴部上部から口縁部に幾何学や並行沈線文を施すものをＤ～Ｋ類として区分した。Ａ類からは凹線文使用の阿高式土器の影響が，Ｂ類・Ｄ～Ｋ類からは沈線文を多用する阿高Ⅲ式土器の影響が，さらにＢ類からは岩崎式土器が，Ｄ～Ｋ類からは岩崎式土器及び岩崎上層式土器の成立から発展段階が看取された。また，志布志市中原遺跡では宮之迫Ａ類は欠落するが，中原Ⅱ類やⅢ類に宮之迫Ｂ～Ｋ類が直接反映されていることから，両遺跡に重複した期間があった可能性を示していた。その他，志布志市倉園Ｂ遺跡では宮之迫Ａ類のみが単独に出土し，曽於市桐木耳取遺跡では７類に細分し，それぞれが阿高式～岩崎上層式土器の各土器に対比可能とした。このように，大隅半島での岩崎式土器及び岩崎上層式土器文化の定着が明らかになると同時に，近年では，清武川上流域の宮崎平野の内陸部にもそれらが大きく展開する実態が明らかになってきている。

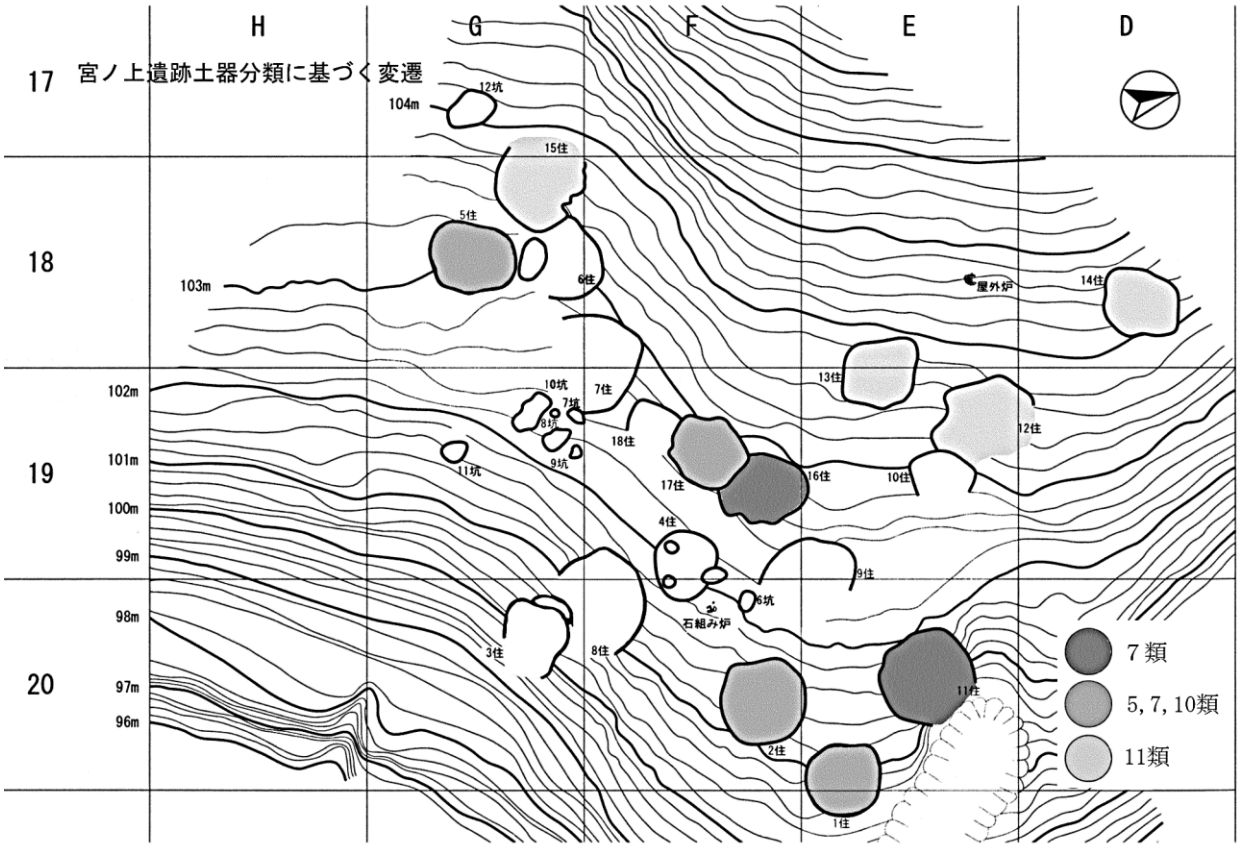
九州縄文土器研究会編の「鹿児島県縄文時代後期前葉遺跡集成表」〈註４〉には，薩摩半島の 82 遺跡，大隅半島の 63 遺跡で，南福寺式土器及び出水式土器，宮之迫式土器〈註５〉の出土が報告されている。そして，薩摩半島の 70 遺跡で南福寺式土器及び出水式土器のそのいずれかが出土し，また，宮之迫式土器とされる 23 遺跡の 17 遺跡は南福寺式土器あるいは出水式土器であり，残る６遺跡でも宮之迫式土器は客体として存在した可能性が高い。一方，大隅半島の 51 遺跡では，宮之迫式土器のみで構成される。このように，薩摩半島では南福寺式土器

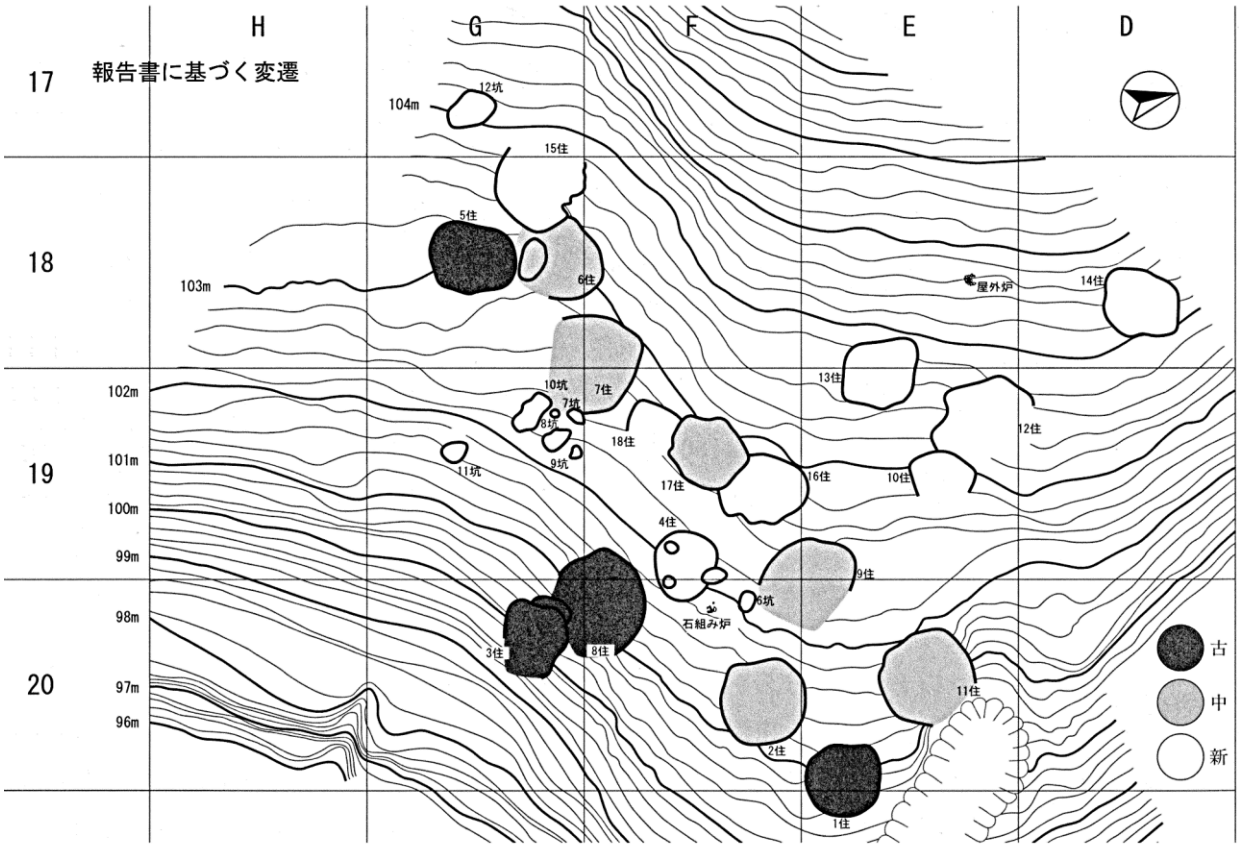


第1図　宮ノ上遺跡及び土器型式分布図



第2図　宮ノ上遺跡の土器型分類





第3図　宮ノ上遺跡土器分類に基づく変遷(上)と山ノ中遺跡報告書変遷（下）

南福寺式土器及び出水式土器の，大隅半島での宮之迫式土器の偏在性が見て取れる。

３　宮ノ上遺跡の土器分類

本遺跡の土器に関しては，文様構成や施文具の差異から当該期の土器群を５類～11 類とし，５類を山ノ中ＩＡタイプ土器，６類を貝殻腹縁刺突文土器，７類を岩崎上層式土器，８類を磨消縄文土器，９類を疑似縄文土器，10 類を南福寺式土器，11 類を指宿式土器とした。その結果，鹿児島市山ノ中遺跡土器群と類似することが明らかとなった。

５類土器はいわゆる岩崎上層式土器であるが，特に，山ノ中Ｉ類土器の大波文を施文するＡ類のみを抽出した。７類も岩崎上層式土器で，凹線文や幅広沈線文で幾何学やマジカルな文様や並行沈線文等で簡素化した文様が見られるが，口縁部に貝殻腹縁刺突文を連続して刺突するものをＡ類，その貝殻腹縁刺突文が消失したものをＢ類とした。なお，これらは山ノ中ＩＢ類と対比可能である。８類は磨消縄文土器，９類は疑似縄文土器で，これらは山ノ中Ⅱ類と対比できる。10 類の南福寺式系土器はＡ～Ｃに３分し，Ａは肥厚する口縁部施文帯にＳ字状文等の凹線を施すものや赤色顔料を塗採する南福寺式土器に該当するもので，Ｂは凹点文主体で坂ノ下式土器，Ｃは沈線文主体で出水式土器を想定しており，これらは山ノ中Ⅲ類に対比できる。11 類は指宿式土器で，山ノ中Ⅳ類に相当する。なお，６類の貝殻腹縁刺突文土器はその量も少なく，７類ないしは 11 類のいずれかに収斂されると見られる。９類の疑似縄文土器については，５類・７類・11 類土器のいずれかに帰属するとの判断から，それぞれの類毎の土器群に並列して第２図に掲載した。

山ノ中遺跡を報告する東和幸は，「・・南九州においては瀬戸内系･西海岸系・南大隅系という個性的な３者の影が強弱を持って反映されている・・」として，山ノ中Ｉ～Ⅲ類土器の同時性を主張する。併せて，その山ノ中遺跡では，発見した 18 軒の竪穴住居群の存続期間を炭化物年代測定から約 200 年間とし，４軒（１・３・５・８号）→６軒（２・６・７・９・11・17 号）→８軒（４・10・12・13・14・15・16・18 号）からなる３期の住居群の占地移動が認められるとしている。〈註８〉そこで，報告書に記載される山ノ中遺跡の 10 軒の住居内出土土器と本遺跡土器群を対比すると，１号・２号・５号住居から７類と 10 類土器が，11 号・13 号・15 号・16 号住居から７類土器が，12 号・14 号住居から 11 類土器が出土していることとなる。したがって，報告される３期の変遷見解とは異なるが，６軒には７類土器が，２軒には 11 類土器が出土していることから，７類，11 類それぞれを主体する時期が存在したことが看取できる。（第３図）。

隣接する鳴野原遺跡Ａ地点の１号と５号竪穴住居跡からは７類土器が，２号竪穴住居跡からは 11 類土器が出土している。また，宮崎市津野町本野原遺跡の「凹線気味の沈線を持つ岩崎式：Ⅰ期」は本遺跡７Ａ類土器に，「太い沈線を持つ岩崎式：Ⅱ期」は本遺跡７Ａ類土器や７Ｂ類土器に対比可能である。なお，７Ｂ類土器と宮之迫遺跡Ａ類土器が出土する都城市上牧第２遺跡１号住居跡も知られている。これらは，７類土器が単独で一定期間存続した可能性を事例と言える。

４　岩崎上層式土器の薩摩半島での分布域

薩摩半島で７類土器主体の遺跡として，本遺跡や鳴野原遺跡Ａ地点，両遺跡間にある堂園遺跡，鹿児島市加治屋園遺跡や大龍遺跡，山ノ中遺跡及び近接する枦堀遺跡や瀬戸頭Ａ遺跡，鹿児島湾南部の喜入町帖地遺跡等 15 遺跡が存在する。（第１図）そして，その分布は，薩摩半島中央部から南に延びる脊梁山地の裾野域，すなわち，北は神之川上流域から，東は楕木川沿いに鹿児島湾を南下して大野岳から清見岳に至り，西は半島の中央部西側の金峰山裾野から万之瀬川上流域沿いに展開している。

遺跡名▼	遺物名▼	本遺跡の分類区分▼	報告書掲載番号▼	分析番号▼	補正年代（yrBP±1σ）			2σ暦年代範囲 単位ないしはcalBC			出典
宮ノ上	岩崎上層式系	5類	No,135	IAAA-110534	3,840	±	30	2,458	2,202	95,4	鹿埋セ171
宮ノ上	岩崎上層式	7A類	No,261	IAAA-110535	3,810	±	30	2,397	2,144	95,4	鹿埋セ171
宮ノ上	岩崎上層式	7B類	No,468	IAAA-110536	3,870	±	30	2,464	2,233	95,4	鹿埋セ171
山ノ中	後期前半	5類	No,6	KAMB-156	3,645	±	35	2,065	1,920	72,0	鹿埋セ103
山ノ中	岩崎上層式	7B類	No,145	KAMB-154	3,610	±	40	2,235	2,135	72,0	鹿埋セ103
山ノ中	指宿式	11F類	No,266	KAMB-153	3,785	±	25	2,290	2,140	95,0	鹿埋セ103
上ノ平	南福寺式	10c類	No,261	IAAA-30982	3,890	±	40	2,456	2,328	95,4	鹿埋セ70
上ノ平	南福寺式	10a類	No,159	IAAA-30983	3,880	±	40	2,455	2,301	95,4	鹿埋セ70
宮ノ上	指宿式	11B類	No,888	IAAA-110537	3,900	±	30	2,469	2,299	95,4	鹿埋セ171

表１　関連土器 C14 測定年代

今回，“薩摩半島中央部から南に延びる脊梁山地の裾野”を岩崎上層式土器の新たな分布域として提示した。そして，その代表的遺跡が本遺跡であり，山ノ中遺跡や鳴野原遺跡Ａ地点，帖地遺跡であるとした。ただ，今回の資料追加を行っても，阿高式及び南福寺式土器は薩摩半島で依然として強固な分布圏を維持している。万之瀬川側下流域の上水流遺跡や芝原遺跡では多量の南福寺式土器が発見される一方，岩崎上層式土器が欠落する実態も明らかとなっている。また，複数個体の岩崎上層式土器を出土している上焼田Ａ遺跡でも，それらが主体的に存在する様相は見られない。ましてや，大隅半島での岩崎上層式土器の優位性が変わることも無い。

５　まとめ

宮ノ上遺跡は，岩崎上層式土器を再認識する機会であり，併せて，大隅半島の土器を宮之迫式土器で一括りすることへの疑問から，従来の岩崎式土器や岩崎上層式土器を活用し，それらが風化していないことを提示した。　狭小な視点であるが，研究の一助となることを期待して，薩摩半島中央部に岩崎上層式土器の分布域の存在することを示した。

【註】

① 南九州市川辺町に所在する旧石器時代～縄文時代後期の遺跡で，2010 年３月『宮ノ上遺跡－旧石器時代編－』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 146 を刊行している。

② 鹿児島県立埋蔵文化財センター2012『宮ノ上遺跡－ 縄文　時代以降編－』『鳴野原遺跡Ｂ地点』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 171

③ 岩崎式土器と岩崎上層式土器について河口貞徳氏は「下層土器は，頭部に指頭圧痕様の凹部の列を有し，頸胴部の凹曲線文は複雑であるが，上層土器は頸部凹文を失い，頸胴部の文様が並行曲線化したものが生じている」とし，これらは「同一系統の前後に継起した２つの形式の土器」で，「下層の土器を岩崎式，上層の土器を岩崎上層式」と命名した。

※河口貞徳 1955「鹿児島のおいたち－先史時代」鹿児島市

④ 真邉彩「鹿児島県における縄文時代後期前葉の様相」『九州における縄文時代後期前葉の土器』第 21 回九州縄文研究会宮崎大会 2011

⑤ 近年，後期土器群を宮之迫式土器と呼称し，従来の岩崎式土器や岩崎上層式土器，綾式土器等の名称を使用しない傾向にある。上記④でも宮之迫式土器と呼称している。しかし，宮之迫遺跡の出土の土器は，上記南九州の土器群の出自や編年を検討する上に不可欠なものである。即ち，宮之迫遺跡の土器群は，中九州や薩摩半島の阿高式土器や南福寺式土器，出水式土器等との交流や接触の痕跡を具現化している可能性が高いことから，細分化して活用することが望ましいと判断している。

⑥ 鹿児島県立埋蔵文化財調査センター2006『山ノ中遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 103

※　１・３・５・８号→２・６・７・９・11・17 号　４・10・12・13・14・15・16・18 号の３段階の変遷で，低い位置から高い位置への２段階の占地移動が認められるとしている。

⑦ 金丸武司 2006「土器の設定・南九州後期土器の編年」『本野原遺跡三』宮崎市教育委員会

⑧ 東和幸「2011 鹿児島市山ノ中遺跡の調査と成果」『九州における縄文時代後期前葉の土器』第 21 回九州縄文研究会宮崎大会

※ 瀬戸内系は山ノ中Ⅱ類，西海岸系は山ノ中Ⅲ類，大隅系は山ノ中Ⅰ類と解される。

【参考文献】

大正９年「出水貝塚」『京都帝国大学文学部考古学研究報告第６冊』

河口貞徳　昭和 28・29 年『出水貝塚』鹿児島県文化財調査報告書第５集　鹿児島県教育委員会 1958

出水市教育委員会『出水貝塚』出水市埋蔵文化財調査報告書

鹿児島県立埋蔵文化財センター1999『南福寺貝塚』『柿内遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 24

城南町教育委員会『黒橋貝塚』城南町埋蔵文化財発掘調査報告書

鹿児島県教育委員会 1981『中尾田遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 15

福山町教育委員会『和田前遺跡』福山町埋蔵文化財発掘調査報告書

鹿児島県立埋蔵文化財センター2004『上ノ平遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 70

鹿児島県立埋蔵文化財センター2007『下水流遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 113

鹿児島県立埋蔵文化財センター2011『芝原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 149

末吉町教育委員会 1981『宮之迫遺跡』末吉町文化財調査報告書２

宮崎県立埋蔵文化財センター1999『上牧第２遺跡・母智丘原第２遺跡』宮崎県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 15
鹿児島県教育委員会 1981『加治屋園遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 14
鹿児島市教育委員会 2001『大龍遺跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書 32
鹿児島県立埋蔵文化財調査センター2001『枦堀遺跡・西ノ原Ｂ遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 30
鹿児島県立埋蔵文化財調査センター2005『瀬戸頭Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 85
鹿児島県立埋蔵文化財センター2011『堂園遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 85
喜入町教育委員会 1999『帖地遺跡』喜入町埋蔵文化財発掘調査報告書６
鹿児島県立埋蔵文化財センター2011『鳴野原遺跡Ａ地点』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 156

鹿児島県立埋蔵文化財センター
研究紀要・年報 縄文の森から 第8号

発行年月　２０１５年１０月
編集・発行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL　0995-48-5811
E-mail　maibun@jomon-no-mori.jp
URL　http://www.jomon-no-mori.jp
印　　刷　有限会社　国分新生社印刷
〒899-4301　鹿児島県霧島市国分重久627-1

Bulletion of Kagoshima
Prefectural Archaeological Center

From JOMON NO MORI

研究紀要・年報　縄文の森から　第8号

二〇一五　鹿児島県立埋蔵文化財センター

No.8　CONTENTS

《Study Note》

Ironware excavated from Underground Carridor-style Brial Chambers in the Kofun jar,Kimotsuki Plain
Shinyashiki Kumiko

X-ray fluorescence analysis of Medieval pottery in Southern Kyusyu,Japan
Kuroki Rie

Ancient South Kyusyu considered from vegetable matters with focus on Tenjindan site
Fukagawa Yuko

Validity and Problems of All Dot Excavation
Tategami Michifumi

Miyanoue site's pottery group in the first half of the end of the Jomon
Nagano Shinichi

The Ritural site to Be Affected Tumulus In Osumi Aria
Nakamura Kouji

Education for local patriotism and archeology
Yoshimoto Teruyuki

《Materials of Archaeological Research》

Introducing Chinaware from Southeast Asia excavated in Kamizuru site by the Manose river lower stream
Uwatoko Makoto

Annual of Kagoshima Prefectual Archaeological Center of the 26th year in Heisei

Kagoshima Prefectural Archaeological Center
October　2015